令和3年度 府立桃山高等学校 学校経営計画（スクールマネジメントプラン）【実施段階】

学校経営方針（中期経営目標）	前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点（短期経営目標）
○文武両道・自主自律の校是のもと、学習と部活動の両立を図り、知・徳・体の調和のとれた創造性あふれる心豊かな人間の育成を目指す。 ○SSH3期目の指定のもと、SSHを本校の中核的な取組とすることで、教育活動の充実を図り、資質・能力「5C」(*)を身に付けた、次世代社会を創造し牽引するグローバルサイエンス人材の育成を目指す。 ○公立高校の中核校として、次代を担う人材の育成を図るとともに、府民の期待に応える学校づくりを推進する。 ○新学習指導要領を踏まえた教育活動を推進する。 *5C 本校では、グローバル化とサイエンスの発展が重要となる次世代社会において、国際的に活躍し得るグローバルサイエンス人材に必要な資質・能力を、以下の5項目として育成を目指している。 ①Critical thinking and problem solving（批判的思考力と問題解決） ②Creativity and innovation（想像力と革新） ③Collaboration（協働力） ④Communication（コミュニケーション力） ⑤Challenge（挑戦力）	(1) 「自主自律」ワンランク上の「文武両道」など、本校の特色や教育理念、またSSH3期目の指定校としての取組等を中学生・保護者に伝え理解を得て、前年度に引き続き、学習意欲が高く本校の様々な取組に高い関心のある入学生を迎えることができた。今後は、入学してきた桃山高校生・保護者の期待に応えるべく、これまでの成果の上に立った、さらなる高みを目指した教育活動を展開していきたい。 (2) SSH事業において、普通科・自然科学科とともに、GS課題研究の充実が図られるなど、探究的な学びが進み、その成果が着実に次世代で活躍する人材としての資質・能力の育成につなげることができている。今後は、3期計画の実践を着実に進め、SSHを学校の文化として定着させていきたい。 (3) 組織的な教科指導や進路指導の実施に努め、進路実現に向けて、学校全体で最後まであきらめない指導を行えた。結果、国公立大学や私立の大学に、多くの生徒が現役合格でき、難関大学へも積極的にチャレンジしてくれた。今後は、生徒の学びの志向性にさまざまな刺激を与え、より高みを目指す進路目標にも積極的にチャレンジできるような組織体制の確立や、生徒の意欲に火をつける学習・進路指導を継続していきたい。 (4) 新学習指導要領や新しい大学入試制度に対応するため、「主体的・対話的で深い学び」への授業改善、記述力や英語の4技能の向上に向けた取組など、組織的に計画的に取組を推進することができた。今後は生徒の多様性に目を向けた、「個別最適化した学び」の構築や、学びにおけるICTの利活用を進めていく必要がある。	(1) 「主体的学習者」の育成に向けて、「主体的・対話的で深い学び」への授業改善、学びにおけるICTの利活用、生徒の多様性に目を向けた「個別最適化」した学習指導等の研究・実践を進め、桃山高校の学びのデザイン再構築を行う。 (2) より高みを目指す進路目標にも主体的・積極的にチャレンジできるような組織体制の確立や、生徒の意欲に火をつける学習・進路指導を継続して展開する。 (3) SSH3期2年目である今年度も、「資質・能力5Cを身に付けた、次世代社会を創造し牽引するグローバルサイエンス人材の育成」という目標を、教育活動全体に落とし込み、全校体制で実践していく。 (4) 生徒が主体的に「夢・感動・挑戦」の舞台を創り上げることができるような「学校行事」の検討や、生徒が自ら高みに挑戦することによって実現する「高いレベルでの文武両道」への仕掛け作りを行っていく。 (5) 教職員自身が桃山高校生にとってのロールモデルとなることを目指し、桃山高校働き方改革を進め、生徒にとっても教職員にとっても魅力ある学校を作る。 (6) 感染症拡大に伴う教育への影響が長期化する中、衛生管理をしっかり行い、安心・安全な学習環境を確保するとともに、学校における学びの経験を保障する観点も大切にして、一つ一つの教育活動を再点検しながら学校運営を行っていく。

●令和3年度「学校経営計画（スクールマネジメントプラン）」実施段階●

領域	重点目標	具体的方策	評価		成果と課題
				最終	
教務部	「主体的学習者」の育成のための教育活動や授業改善の取り組みを支援するとともに、適切な評価のあり方について研究する。	公開授業などを通じて「個別最適化」した指導や課題の工夫を、教科をこえて共有する機会を設ける。	B	A	観点別評価の導入に向けては、教科主任の先生方および、教科の先生方のご尽力により、2学期に試行を行い、その成果と課題を教科主任会において共有した。来年度入学生からの実施に向けての道筋を付けることはできたと考えている。公開授業については、各教科内で成果を共有していただき、有意義であったが、「個別最適化」した指導や課題については、踏み込んだ提案はできていない。コロナ感染の度重なる拡大により、落ち着いた平常の教育活動がなかなか行えず、その対応に追われて十分な議論をする余裕がなかったことも一因である。来年度から導入されるひとり一端末の活用とも関わって、今後の課題だと考える。
		観点別評価の導入に向けて、教科主任会において問題提起や提案を行う。	A		
生徒指導部	生徒が主体的に「夢・感動・挑戦」の舞台を創り上げることができるような「学校行事」の検討や、生徒が自ら高みに挑戦することによって実現する「高いレベルの文武両道」への仕掛け作りを行っていく。	球技大会 ○生涯にわたってスポーツを楽しめる能力や態度を培う。 体育祭 ○生徒会を中心に、生徒全員の創意工夫を生かした自主的な取り組みを行い本校のよき伝統を継承する。	B	B	【成果】 ○球技大会において、新しい種目を取り入れ、生涯にわたってスポーツを楽しめる能力や態度を育成することができた。 ○体育祭において、体育委員を中心に、生徒全員の創意工夫を生かした自主的な取り組みを行い本校のよき伝統を継承することができた。 ○文化祭は残念ながら中止となった。しかし、2学期までの準備期間において、HR・生徒会・部活動の活動の中で一人一人の自主性を促す取り組みができた。 【課題】 ○部活動において、積極的参加を促し、加入率の向上と活動実績の広報活動を行ったが、当初の加入状況微減、途中退部数の微増が課題といえる。しかし、コロナ禍の中において生徒達は状況に応じた感染予防対策を行い積極的に活動に取り組んでいた。
		文化祭 ○生徒一人一人の自主性を養い、HR・部活動・生徒会の活動を充実させ、自主的集団として成長することを目的とする。	B		
		部活動への積極的参加を促し、加入率の向上と活動実績の広報活動を行う。	C		
進路指導部	ICT機器を活用した体系的なキャリア教育体制を構築し、早期から生徒の進路意識を高め、希望進路実現に向けて意欲的に学習に取り組む仕掛け作りを行う。	1 進路学習においてBYODを取り入れた職業・学部・学科研究を行う。	B	B	・新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から対面での実施が制限された場合においても、動画による配信やWEB会議システムZoomを利用してオンラインでキャリア教育ガイダンスや入試説明会を行うなどICT機器を活用して生徒の進路意識を高めることができた。 ・ポートフォリオの作成においては、一人一端末の導入を踏まえ、タブレットを活用して作成やデータ保存ができないか今後さらに検討していく必要がある。
		2 マナビジョンポートフォリオ機能を活用し、学校内外の「日常の記録」を入力することを習慣化させる。	C		
		3 ICT機器を活用した進学補習やキャリアカウンセリングを行うことで生徒の進路意識を高めるとともに学習に対する意欲に火をつけ、学力を伸長させる。	B		
教育企画推進部	「主体的学習者」の育成に向けて、「個別最適化」した学習指導等を実践するために、ICT環境を整備し、利活用を図る。	ICT機器の整備、使用基準の作成、研修会等を実施する。	A	B	教員用端末・電子黒板・Classi等、ICT機器の整備、仕様基準の作成を行った。 また、新型コロナウイルス感染拡大防止と学習保障の観点から、授業配信やClassiを用いた学習支援など、オンライン環境の整備を行った。 さらに、来年度実施予定の1人1端末の導入による個別最適化学習の実現に向けて、企画準備や教員研修を実施した。 機材や人材の不足から、ICTに関して対応しきれない場面があったことが課題。
	「資質・能力5Cを身に付けた、次世代社会を創造し牽引するグローバルサイエンス人材の育成」という目標を教育活動全体に落とし込み、SSH3期2年目の事業を全校体制で実施する。	SSH3期申請内容に基づいて令和3年度事業計画の取組を実施し、効果検証と成果普及を行う。	B		
保健部	校内美化を徹底すると共に生徒の環境美化意識を高め環境保全能力を向上させる。	『前日より美しく』をモットーに日々の清掃活動に取り組みさせる指導を徹底する。月1回の大掃除の際には、教室及び廊下の壁に付着した埃や窓の蜘蛛の巣を取り払い作業を学年ごとに実施する。	A	A	・大掃除の際に教室・廊下の蜘蛛の巣やほこりを払う作業が出来た。 ・事前の教員による（学期はじめの）清掃により美化された教室の状態を維持するようなクラスがあった。 ・各クラスの美化委員により黒板けし剤やゴミ箱の清掃ができた。 ・保健委員の活動により、教室内の換気等衛生管理ができた。 ・学期ごとの安全点検により、校内の危険箇所の改善ができた。 （上記3項目以外） ・担任を中心に教室や廊下の消毒等、日常的に校内の美化衛生管理ができた。 ・2号館トイレの改修により、清掃用具・方法を見直し、美化の維持向上に努めた。
		美化・保健の両委員会のそれぞれの活動を充実させ、校内学習環境の衛生管理について維持向上の意識を全校的に啓発する。	A		
		安全点検を学期ごとに実施して、事務部と連携して改善する。	A		

●令和3年度「学校経営計画（スクールマネジメントプラン）」実施段階●

領域	重点目標	具体的方策	評価最終		成果と課題
図書部	「5C」を身に付けた人材の育成、「主体的学習者」の育成に必要な桃山高校の「学び」を探究する。	図書委員による自主的、積極的な図書館運営（班活動、読書月間における各種行事の立案と実践など）を行う。	B	B	・図書委員は主体的に図書館運営へかかわることができたが、「主体的学習者」を目指して、さらなる活動の発展に努めることが課題である。 ・「5C」を身に付けた生徒の育成に向けて、読書活動の啓発に努めたが、まだ改善の余地がある。 ・会場の変更、2～3階席の利用、手指消毒、座席消毒、検温等、万全の新型コロナウイルス対策をし、芸術鑑賞を実施した。
		課題研究をはじめとする各授業での図書館の活用や読書感想文集の発行、教職員の図書推薦などの様々な仕掛けを試みる。	B		
		「5C」に関する図書を充実させるとともに生徒に向けて紹介する。	B		
第1学年部	人とのつながりを大切に、協働して取り組むことで共に成長し合える集団を作る。その中で、生徒たち一人ひとりの他者を尊重する心や自己肯定感を育む。	各担任は生徒たちの思いを聞き出すことを大切にする。そうすることで、生徒たち一人ひとりに相談することの重要性と話を聞く姿勢の大切さを実感してもらい、生徒たちのつながる力の成長を促す。	B	B	【成果】 ○コロナ禍において学校行事や行動等が制限されるなかで、生徒たちの思いに寄り添いながら、各担任が慎重かつ丁寧な学級運営を実施した。 ○ポートフォリオの活用や定期考査の振り返りなどを通じて、生徒たち自身が自己を振り返る機会を設けることができた。また、手帳等を活用し、スケジュールや課題を自らコントロールする意識を付けられた。 ○各分掌と連携しながら、講演会やSSH、探究の取組等を実施できた。また、生徒の進路希望に応じた2年次の選択を指導することができた。 【課題】 ●社会の変化に伴い、様々な課題を持つ生徒に対しては、生徒自身を尊重する立場に立って例年以上に注意深く見守る必要があると感じている。 ●大学や学部選びのための進路指導に留まらず、キャリア教育という観点から、社会に出た自分をイメージできるような取り組みを実施したい。
		学校行事、LHRを学年/学級集団がさらに成長するための機会であると捉え、ポートフォリオや学年通信を通じて他者の視点からも行事を振り返ることで、学年/学級集団への帰属意識を高める。さらには、ポートフォリオや学年通信を、他者の視点を意識した上で1人ひとりが自らの行動を振り返りできる機会として捉えさせることで自身の成長へとつなげる。	B		
		様々な教育活動を通して、生徒一人ひとりが自らの適性・能力などに気づき、主体的に進路選択ができるような指導を充実させる。	B		
第2学年部	価値観の多様性を通して、自尊尊重の精神や主体性を育み、自己を確立しながら共に成長し合える集団を作る	GS探究II、LHR、学年集会、学校行事、学年通信等を連動させて、個々の生徒の見方・考え方を学年全体で共有し、価値観の多様性に気づかせる。レポートやポートフォリオ、手帳等を活用し、内省する習慣を身につけさせる。	B	B	○学校行事や探究の授業、ホームルーム活動等における生徒個々の考えや価値観について、学年通信を通して日常的に学年全体で共有することができた。また、日々の活動を保護者へ向けて情報発信することができた。 - 学校行事やホームルーム活動等、コロナ禍における計画の変更はあったが、各分掌と連携し、臨機応変に対応しながら実施することができた。 - 遠足や研修旅行を通して、生徒主体の様々な取組を実施できた。学習面でも、桃塾（サタスタ）に学年全体で取り組む雰囲気をつくることができ、生徒の主体性を継続的に育むことができた。 ●1年後の進路実現および卒業後のキャリア形成について、引き続き生徒個々の意識を高めながら、具体的な行動に移すための取組を学年全体で模索し、実施していく。 ●担任を中心に、生徒と深く関わりながら一人一人の個性を尊重し、主体性を引き出す。生徒の適性や進路希望等を教員間で情報共有し、複数の教員が様々な機会を通して多角的に関わりながら支援していく。
		進路実現までの2年間に見通しをもたせ、長期的な学習を意識させる。サタスタや模試等を活用し、節目ごとに目標を立てさせたり、自己分析を行わせたりすることで、主体的な学習行動を促す。	B		
		教員はそれぞれの人となり大切に、生徒一人一人の内面と深く関わりながら、日々の声掛けや個人面談、レポートや手帳へのコメントなどを行い、夢や憧れを共有する主体的学習者のサポーターを目指す。学級や個々の生徒の状況を日常的に交流・共有し、副担任も含めて複数の教員が多角的に生徒と関わる。	B		
第3学年部	すべての生徒が希望する進路を実現できるよう、自分の個性を生かし、主体的に学習に取り組む資質や能力を伸長するための指導を継続的に行う。	個々の生徒との対話を重視し、心身の状態を的確に把握するため、手帳の活用や、個人面談を基軸とした指導を展開する。	B	B	各担任がそれぞれの生徒に対して、日常的に対話の機会を作り、適切な時期に丁寧な個人面談を行うなど、効果的な生徒指導や進路指導を行うことができた。
事務部	限られた予算を効果的に運用し、安心安全を最優先に予算編成を行う。	安心・安全に向けた設備・施設の整備。	B	B	安心・安全な施設設備の管理や整備について適切に実施できた。今後は、時代の変化に合わせた学習効果の向上や指導の効率化等を視野に整備を進めたい。
		時代の変化に合わせたスムーズな予算の運用	B		

●令和3年度「学校経営計画（スクールマネジメントプラン）」実施段階●

領域	重点目標	具体的方策	評価		成果と課題
				最終	
国語	国語で的確に理解し伝え合う力を高め、思考力、判断力、表現力を伸ばす。そのために、「主体的・対話的で深い学び」を通して、主体的学習者を育成する。	「主体的・対話的で深い学び」の授業スタイルを通して、ICTを活用した研究・実践を進め、技術や方法を共有し、「チーム国語科」として効果的な指導を行う。	B	A	前年度の休校や授業時間短縮期間における自学教材作成の工夫を通じて、今年度本校国語科学習の基礎力養成に効果的な方法を獲得した。それらをさらに発展総合させ、令和4年度入学生が取り組む入学前課題のオリジナル教材開発作成を行った。 ICT教材の開発を積極的に行うとともに、各種研修会に積極的に参加し、全てを国語科内で共有して生徒の学力向上に還元した。 国語科として新しい時代に即した指導内容をますます発展させていくことを課題と考えている。
		生徒の多様性に対応できる「個別最適化」した学習指導を行うことによって、主体的に学習を進めるための具体的方法と考え方を身につけさせる。	A		
地歴公民	興味・関心と学習意欲を高め、自ら学ぶ力、考える力を育成する。	板書、プリントを充実させ、資料（写真、統計、史料等）や視聴覚教材を有効に活用する。	B	B	板書、プリントを充実させ、資料（写真、統計、史料等）や視聴覚教材の有効な活用に努めた。 電子黒板の活用に向けて、公開授業等を利用した研修に努めるなど、ICTを活用した授業の構築に取り組んだ。今後も各教員が各自の課題改善に向けた研修を続けていかなければならない。
		ICTを活用した授業やアクティブラーニングの授業を研究・実践し、「主体的・対話的で深い学び」による思考力・表現力等の育成を図る授業改善に取り組む。	B		
数学	学習意欲の向上を背景とした自発的学習習慣の形成の実現と数学的、論理的思考力の獲得を通して、実践問題に取り組む学習者を育成する。	小テスト、定期考査、模擬試験の到達度目標を早期に提示することで、学習計画の作成を習慣化させる。目標へ到達する過程においては、個々の生徒の学習方法を生かすように工夫する。また、習熟度の高い生徒向けに数学検定を中心として、数学オリンピックや数学コンテストへの参加を促し、授業とは違う観点で数学に触れる機会を増やす。	A	A	・コロナウイルス感染拡大防止に伴う措置の中で、授業展開・教材の工夫により概ね予定通り実施することができた。また、数学オリンピックや数学検定に継続的に取り組む集団が形成され、興味のなかった生徒も参加するようになってきた。 ・ICTを活用して、より視覚的に、数学の事象を捉えさせることができた。今後は、そこで獲得した能力を生かして、論証する力を育成していく必要がある。 ・新指導要領に向けて、授業の中で、観点別評価を意識した発問・問題の提示を行い、これまで以上に生徒が主体的に考える授業展開を行った。
		深い学びにつながる発問、視覚的教材の工夫を今年度も継続して行う。また、提出されたレポート形式、記述形式の添削課題を、ICTを利用して、生徒への共有を図り、数学的、論理的思考力を洗練させる。	A		
		新指導要領に向けて、指導計画・評価計画の確立と教科内での共有化を図る。	B		
理科	見通しをもった観察・実験の実践など科学的に探究する活動の充実などにより、興味関心を高め、主体的学習者の育成及び学力向上につなげる。	探究的な観察実験の充実を図る。	B	B	コロナ渦で生徒自身による観察実験が制限される中で、感染防止対策の観点から実験形態を工夫し、探究的な観察実験を実践することができた。 パフォーマンス課題については、一部の教科において開発および検討を行ったが、教科全体として十分に共有できなかったため、来年度も引き続き、主体性の評価方法と併せて検討を続けたい。 主体的な学習を促すICTを活用した実践および報告を教科内で共有することができ、授業の質を高める共通認識をもつことができた。
		パフォーマンス課題を用いた評価方法を開発・検討する。	B		
		主体的な学習を促す指導方法や実践内容を共有する。	B		
保健体育	体育・保健の見方・考え方を働かせて課題を発見し、合理的、計画的な解決に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを継続するための資質・能力を育成する。	具体的な知識と汎用的な知識とを関連させて理解できるようにするとともに、科学的知識を基に技能を身に付けたり、技能を身に付けることでその理解を一層深める等、知識と技能を関連させて指導する。	B	B	具体的な知識を与え、グループワークや振り返りシートを活用し、技能の向上を図った。知識を理解させることに限っては一定の成果を感じるが、その先の技能の向上に向けてのICTの有効活用やハード面の整備が課題である。 ICTを活用した保健授業を展開し、自ら課題を発見し、解決に向けた思考・判断力や発表活動を通して他者に配慮しながらも自らの健康について主体的に考える力を身につけさせた。 体力の向上を重視し、健康や体力の状況に応じて自ら体力を高める方法を身に付けさせた。 実社会でも生かせるように、個々に応じた体力の向上や生涯にわたって心身の健康の保持増進のために継続的に取り組ませることが課題である。
		自他や社会の課題を発見し、合理的、計画的に解決したり、新たな課題の発見につなげたりすることができるよう知識を活用したり、応用したりして、思考し判断したことを、根拠を示したり他人に配慮しながら、言葉や動作などで即座に表したり、図や文章及びICT機器等を活用して筋道を立てて伝えたりすることができるよう指導する。	A		
		愛好的態度及び健康・安全、公正、協力、責任、参画、共生について、汎用的な知識を関連させて指導することで、主体性を促し、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現していく資質・能力を育成する。	B		
芸術	音楽：新学習指導要領の趣旨を踏まえた学習指導の徹底を図るとともに、本校生徒の実態に即した授業展開の工夫に努める。 美術：5Cの育成を目指した授業を組み立てる。 書道：書に親しむ活動を通して、感性を高め、書写能力の向上を図り、主体的な学習者の育成に向けた授業展開を行う。	主体的に音楽に関わり、感受する力を育成するため、表現、鑑賞のそれぞれの学習内容について、批評活動を積極的に取り入れる。	B	B	題材によっては、歌唱に関係するものもあったが、制約の中でも相互発表等の機会を可能な限り設定し、一定の成果を収めた。一人一台端末の導入を踏まえ、いかに効果的な授業計画作成できるかが次年度以降の課題である。 共同制作について昨年度は計画はしていたが実施できなかったが、今年度は密にならないよう配慮をして何とか取り組むことが出来た。文化祭で展示する作品というコンセプトのもと制作させたが、残念ながら文化祭が中止となってしまい展示できなかった。 2学期の最初の課題として今年も読書感想文集の装丁というテーマで取り組んだ。美術やデザインが社会に役立っていることが実感できる良い機会になったと思われる。また、展示された生徒作品へのメッセージカードは本人の励みになる。欲を言えば、もう少し教員の鑑賞者数が増えてほしいところである。 次年度からの観点別評価の導入にあたって、同じ課題であってもそれをふまえた授業展開を考えなければならぬと感じている。
		共同制作やグループ内のディスカッションの活動を積極的に取り入れた授業を組み立てる。	B		
		作品の校内展示や学校の諸活動と連携した取り組みを進め、美術やデザインと社会の関係性について考えたり、客観的な視点で自分の表現を見つめさせる機会とする。	A		
		基礎・基本を身につけ、「表現」、「鑑賞」の学習内容に、批評活動を積極的に取り入れた授業展開を行う。	B		

●令和3年度「学校経営計画（スクールマネジメントプラン）」実施段階●

領域	重点目標	具体的方策	評価		成果と課題
				最終	
英語	英語学習における「主体的学習者」を育成する。	授業、家庭学習を通して、主体的に英語力向上に取り組めるよう、1年間の学習計画と効果的な学習方法を明確に示す。	A	A	成果 ・全学年で、生徒が自身の学習計画を立てやすいよう、年間の小テスト・週末課題スケジュールを配布した。 ・コロナ禍での学習活動の制限下も、工夫をして生徒相互の活動やパフォーマンステストなど、生徒の発話・読解・活動が中心になる授業を、各担当学年ごとに行った。 ・プレゼン式や生徒⇄教員のやり取り中心のパフォーマンス課題から、より即興的かつ生徒相互のやり取り中心の、比較的難しいパフォーマンス課題に変更したが、アンケート結果を見ても生徒の達成感が高く、有意義なパフォーマンス課題・評価の開発ができた。 課題 ・低学力生徒に対する指導体制が確立していない。 ・パフォーマンス課題の評価はまだ改善の余地がある。
		教員による解説を簡潔にし、ペア・グループワーク、パフォーマンステスト等を通して生徒の英語の発話量・読解量・活動量を増やす。	A		
		従来から続けているパフォーマンス課題をさらに推進し、課題内容と評価の改良に取り組む。具体的には、第二学年を中心に、従来のスピーキングによるパフォーマンス課題を即興応答、ディスカッション、リテリング式に変える。	A		
家庭	人の一生と家族・家庭及び福祉、衣食住、消費生活などに関する基礎的・基本的な知識と技能を総合的に習得させ、家庭や地域の生活課題を主体的に解決するとともに、生活の充実向上を図る能力と実践的な態度を育てる。	講義や実習・実験を通して、家族の健康と衣食住についての知識を身につけさせ、実践する力を育てるように指導する。また、清潔に衣服を管理し、時には取れたボタンをつけ補修する程度の力を育てるため、被服製作実習を取り入れる。	B	B	・食生活分野では、高校卒業後の生活の中で朝食の欠食が増加する現状と問題点や、中食を利用する際の注意点など、一人暮らしと食生活の課題を考える時間がとれた。 ・経済の分野では成年年齢が18歳に引き下げられることから「おとなドリル」を用いて、家計(収入と支出)の構成や、契約に関してなど、成年として生活する権利と責任について理解することができた。特に、契約をめぐる困ったことが生じた際の「188(いやや)」は記憶に残った生徒が多い。 ・被服製作では、2学期末から1月にかけて、3年生は受験勉強にラストスパートをかける時期に取り組んだ。そのため、エコバッグを作る意義を①「並縫い」「半返し縫い」「本返し縫い」「まつり縫い」「ボタンつけ」をするのは、これからミシンを持たない一人暮らしでズボン等の裾がほつれた時やトートバッグに穴が開いたシャツのボタンがとれた時など、自分で直す意識を育てるため②「バ」のレジ袋が環境に大きな問題となっている現在、大学生としてエコバッグを持つ生活をするための2点を明確に周知徹底して取り組んだ。結果として、ほとんどの生徒が非常に積極的に取り組み、製作の時間を上手く気分転換に利用して充実した感想を上げてくれた。 ・保育分野では、赤ちゃん人形を使用し子どもを抱くときの注意点を体感することができた。また、遊びを通して乳幼児の発達を知ることができた。 ・コロナ禍での調理実習の実施方法に課題が残る。
		消費生活について、経済のしくみを理解し、生活を管理できるように指導し、ロールプレイなどを行い、消費行動が環境問題に関わることを理解を深める。	B		
		乳幼児と高齢者の生活や福祉についても、ライフステージごとの心身の変化を「シニア体験」「マタニティー体験」実習により理解を深める。	B		
情報	ICTを適切かつ効果的に活用し、自己調整しながら主体的に学習をすすめることのできる資質・能力の育成を図る。	ICTを活用して5つの資質・能力5Cの育成を図るアクティブラーニングを取り入れた授業を日常的に実践する。	B	B	資質・能力5Cの育成を図るアクティブラーニングを取り入れた授業を積極的に実践できた。 パフォーマンス課題のルーブリックによる評価を行い、適切な観点別評価について実践的な研究ができた。
		パフォーマンス課題のルーブリックによる評価を十分に取り入れ、適切な観点別評価について実践的に研究する。	B		
グローバルサイエンス	教科間、または大学や外部との連携を通して、予測不能な時代で活躍するのに必要な資質・能力である「5C」を育成を図る。	第1学年の各GS科目の評価方法において、適切なパフォーマンス課題及びそれを評価するためのルーブリックを作成し、運用する。	B	B	第1学年の各GS科目においては、各学期の取組に応じたパフォーマンス課題を行った。 第2学年のGS探究IIにおいて、自然科学科では各取組段階の活動を適切に評価できるルーブリック及び生徒自身が活動を振り返るポートフォリオを導入した。
		第2学年のGS探究IIにおいて、いずれの研究テーマでも共通する探究の過程を重視したカリキュラムを構築、実践する。	B		

学校運営協議会による評価	・コロナ禍の中、SSHに関わる取組が活発に行われた。生徒のエネルギーをうまく取り込んで活動できている。 ・生徒1人1台端末の導入に向けて、ICTに関わる教育が推進されているが、教職員のスキルを向上させることや、ICT支援員など外部の人材を活用することが求められる。 ・各分野において、生徒・保護者からの高い評価を得られる活動が展開できている。

次年度に向けた改善の方向性	・コロナ禍での教育活動で認識できた、学びの「場」としての学校の機能を一層高めていく。授業はもちろん、学校行事や部活動においても、桃山という場でこそ得られる体験の機会創出を目指していく。 ・新学習指導要領における教育課程、1人1台端末（BYOD）を中心とした「桃山まなびのICT化」等、教育の根幹に関わる研究課題について、全校体制で取り組んでいく。 ・SSH3期3年目を迎えるにあたり、GS科目探究Ⅰ・Ⅱの充実や、トップ人材の育成プログラム、パフォーマンス評価研究等、今期の中心的課題への取組を進めていく。 ・生徒の状況や心理の変化を把握し、支援の必要な生徒に対して、早期に組織的に対応できる体制を整えていく。 ・本校の魅力創出と発信について、手法の研究を行う。